

森田一氏（元大平首相首席秘書官）に聞く

# 大平内閣に関する真実

―聞き手・泉 宏



総選挙後の国会に初登院して衆議院の女性職員に議員バッヂを付けてもらう大平首相。左に森田一首相首席秘書官（1978年12月8日）

福田総理は会談のたびに禅譲を示唆

——森田さんは大平さんを内側から、身内の立場で見てこられたわけで、大平さんの考え方や行動が新聞記事や歴史上の事実とされていることと、だいぶ違っていたということもあると思います。その辺も含めて総理時代のことを中心にお伺いします。

まず、一九七八年の自民党総裁選では予備選が行われました。あの時、大平さんは予備選に至る前に、福田赳夫総理とのいわゆる大福会談を何回もやりました。大平さんは最後まで、福田さんから政権禅譲があるんじゃないかということ、われわれにもそれとなく言われていましたが、選挙直前になって「俺は戦うぞ」という方向に変わられました。その辺りの経過からお聞きしましょう。

森田 福田さんは大福会談が行われるたびに「俺は大平君が出るんだったら、推薦人になるよ」というようなこととか、それから「やっぱり大平君がやるべきだと思うな」とか、自分が禅譲するかのような言質というか言動を繰り返していたというのが真相です。ただ、自分が出ないとは、はっきり言わないのです。ある時、「福田さんから電話です」と言つんで、お手伝いさんが取り次いだら、大平の顔が見る見る真赤になったんです。それで、「福田さん、なんて言ったんですか」と聞いたたら、「もう自分の陣営をまとめ切れなくなった」と言ったというんです。それで大平が「分かりました」と言つて電話を切ったんですけれども、その時が（総裁選での大福決戦に至る）決定的な瞬間だったと私は思っています。

——あれは一〇月中旬の朝でしたよね。

森田 そう、朝でした。

——私もその時おりまして、ちょっと遠くで電話をしていた大平さんが突然、大きな声で「そうですか、分かりました」と言って、ガチャンと切ったのを記憶しています。その後、おたずねしたら、「要するに、福田さんは森（喜朗）とか若い連中が、とにかくもう俺をかつくと行って許してくれないんだ。そういうことを言ってるんだよなあ」と、大平さんにしては珍しくとがった口調で、言われたのを憶えているんです。

森田 表情がね、顔が真赤になったんです、上気して……。部屋に戻る時には、元の表情に戻っていたけど、電話の間中は……。それまでも一応、（予備選に）出る準備はしなければいかんということと、鈴木善幸先生たちに話してたと思うんですけども、はっきり出るという最終決断をしたのは、その一瞬だと思うんです。

——それまでは予備選実施とは言っていないでも、結局、話し合い禅譲で決着させるといふ方向で……。大平さんも、いわゆる大福密約というものが生きていると思っておられたのではないですか。

森田 そう思っておったと思います。（大平は）裏切られたという感じが強かったと思いますね。それというのも福田さんは繰り返して、大福会談が終わりそうになる時に、ポロッと言うんですね。「外へは誰にも言えないけれども、君だけには言うけれども俺が推薦人になるよ」とか何とか……。

——しかし、そこに至る、かなり前に團田（直）さんや鈴木善幸さんらが立ち会った、いわゆる大福密約というのがあったわけで……。

森田 あれは、破られるかも知れんということは、大平は思っていたのじゃないでしょうか。岸信

実 介さんと大野伴睦さんとの密約なんかの前例を見ていますからね。それよりは、福田さんが「推薦人になるから」とか言った、大福会談のほうにウエイトがあったと思いますよ。しかし、善幸さんはじめ宏池会の皆さんは「それは信用できない」と言っていたんだが、だけど大平は「いやそうは言っても、去二人だけの話があるから」とかいうことで、そこまで来ていたわけですね。

——福田流の大平取り込み作戦だったわけですね。そういう経過があつて、結局、予備選に突入する。私の記憶では予備選が終盤を迎えた時、夜汽車で京都だったか大阪だったかから帰る時、大平さんが窓の外を見ながら「おい、俺は勝つぞ、勝てる」と言われた。「いや、そんなこと言つたつて、今日、宏池会で分析したら、一〇〇票か二〇〇票、負けているという結果が出たそつです。本当に勝つと思つてるんですか」と言つたら、「見てろ、お前、俺は勝つから」と、強気でしたね。

### 総裁予備選の票読みでは小差だった

森田 私はね、その話は直接、大平からは聞いておりません。おりませんが、田中角栄さんの分析というのが、大平に大きく影響を与えていたと思います。大平自身、これまで田中、三木（武夫）、福田さんに先を譲ってきた。今回の予備選に出馬しなければ、もう自らの政治生命はない、という自覚があつたようです。当時の情勢としては、予備選は現職総理の福田さんが優位、しかし本選挙は参院で優勢な大平がやや優位というところだったと思います。

——あの時に、福田さんは直前の記者会見で「二位だったら、（その人物は）降りるべきだ」と発

言いました。そのことが福田さんが（本選挙を）辞退せざるを得ない引き金になるわけですが、その点について大平さんに「二位だったらどうしますか」と聞いたら「いや、俺は本選挙にも出るんだ」という趣旨のことを言われたんですけれども、その辺は本当はどうだったんですか。

森田 本選挙は堂々とやるべきだ、ということは大平は記者の皆さん方に言っていました。その本心は、予備選で二位であっても、小差であれば本選挙で逆転できる、ということですよ。これも角栄さんとの話で、打ち合わせができていたと思います。

——その小差というのは、どれぐらいと見ていたのですか。

森田 一〇〇票ですね。

——一〇〇票以内なら、ほぼ互角の支持だから、雌雄は本選挙で決すべきだ、ということですね。逆に言うと、福田さんは大平さんが迫ってきたため、やっぱり二位の候補は降りるべきだ、と。こういう話だったわけですかね。

森田 そうです。自分が一位になると思っていましたからね、福田さんは……。それで予備選の結果が出て、大平は宏池会からいったん、瀬田へ帰ろうとするわけです。ところが、もう夕方でしたね。ちょうど用賀インターを下りたあたりで、たしか福田さんがこれから記者会見をするという情報が入って、引き返すんです。その瞬間に、おかしいなというふうに思っただけですね。会見をするということと聞いた瞬間に……。 （大平は）福田さんが本選挙を辞退するとは思っていませんでしたよ。やっぱり雌雄を決することになると思っていたのじゃないでしょうか。

——あの時、「いや予想外で、ちょっと今、俺、何も言えないんだ」というのが、宏池会に戻って

実  
きた時の大平さんの感想だったけれども……。まあ、結果的には割合すんなりと大平政権ができるわけですけど、まあ、それから先は人事で揉めますね。そこで一つお聞きしたかったのは、組閣参謀というか、大平さんが本当に自分の気持ちを打ち明けて、こつこつというふうにしたいという形で相談していた相手は、誰だったんですか。

### 『大平正芳の政策要綱資料』は本選挙用

森田 相談相手はやはり鈴木善幸先生だったと思います。善幸さんと、それから田中六助先生が官房長官に決まっていたから、六助さんですね。人事で揉めたはじめは幹事長人事です。総裁派閥が幹事長になるべきではないという議論です。大平は善幸さんを幹事長にするという強い意志だったんです。強い意志だったんだけど、福田、三木、中曽根三派が反対したし、それでこの反対が非常に強いものですから、私の記憶では、善幸さんが斎藤邦吉先生を代りに立てたらどうか、と大平に言われたんだと思います。福田派などの三派から見ると、何と云っても善幸さんが総裁選挙の中心人物です。やっぱり善幸さんが非常に目立って、福田さんからすると、善幸さんだと何とも承服できかねるという感じがあったんじゃないか、と私は見てるんです。

——鈴木善幸さんは、(田中)角栄さんや二階堂進さんと非常に親しい。だから「直角」であるからダメ、ということでしたが、それだったら斎藤邦吉さんは「直角」どころか、角栄さんとても親しく話せる人物で、おかしいとは思っていませんが。

森田 それは総裁予備選を戦った上での感情論ですよ。普幸さんですね、自分から先に自分が下りると言わないと、大平のほうから言いにくいだろうという感じがあつて……。大平に対して自分から下りて、斎藤邦吉さんを推されたと思います。一方、大平の方は善幸さんから言われるまでは、斎藤邦吉幹事長というのは頭の中になかったと思います。

——あの時の斎藤邦吉さんは、物すごく緊張してましたね。

森田 それで、斎藤邦吉さんは夜中に現れるわけですね。私の家に来たんです。警察官の外套を着て、警察官の帽子をかぶつて……。それで大平邸に入つて、了承を取つて、それから（大平が）福田さんに連絡して、「幹事長は斎藤邦吉で行きたいと思うけど」と言い、福田さんが了承して、「三木の方には私から説得する」と言つて、福田派と三木派を福田さんが説得してくれた、ということですよ。

——一方、内閣官房長官候補は田中六助さんか、伊東正義さんが両説あつたのですが、早々と六助さんに落ちつくわけですね。六助さんを官房長官に決めたのはいつ頃ですか。

森田 これはね、大平が総裁になつて、すぐに田中六助先生が毎日、瀬田の大平邸へ来られたんです。それで、「私を官房長官にしてくれ」ということを執拗に言われて、最終的に当選回数も伊東さんより上だし、「六さんで行こうか」と決心したんだと思います。六助先生を官房長官にしない時は大変なことになるけれども、伊東さんをしなかつた時は、我慢してくれる、というふうに信じていたわけです。で、伊東さんは家に籠もつちやつて、出てこなくなつちやつて、それで大平が「お前、行ってこい」というんで、私が伊東さんをお訪ねして、事情をお話して了承していただいたのです。

——その後、大平さんとその話をちらつとした時に、「伊東は言えば分かつてくれるし、言わなく

ても分かってくれる、と俺は思う」といわれていましたね。

森田 そう、そう。そういうことです。

——伊東さんも後で聞いた時には、「いや、俺もそれは分かっていた、大平は俺を選ばないと。その代わり、次は本当に危なくなる勝負の時は俺だぞ」と。こういうことをおっしゃっていたんですが、結局最後まであの二人は、そういう人事にまつわる会話というのはしなかったのですか。

大平・伊東は人事の話をしなかった

森田 しなかった。最後まで……。第二次大平内閣の時に、伊東さんは「自分を官房長官にしてくれ」ということは言っていないですね。

——何とか組閣が済んで、その後は割合と平静な状況が続くわけですから、その中で、大平さんは解散のタイミングというのを図っていくわけですね。

森田 大平内閣ができてから、毎朝、田中官房長官が大平邸にやってきて、「総理、解散しましょう」と、言い続けたんです。それに対して、大平は何も答えないままなんですけども、私が横で見ていると、「ああ、決心したな」と思ったのは、統一地方選挙で東京都知事と大阪府知事を取り返した時ですね。この時に秋口に解散しようと思断したと思います。ただ、私が見ておったのでは、（大平は）一言も言いませんでしたね、「解散する」とは。六助先生にも一言も言いませんね。それ以降も、「解散しましょう」と六助先生が言い続けたんです。

——なるほど。それが通常国会で最後に知らん顔して、法案を皆んな流してしまうことにつながっ

たわけですね。そして事実上、次はもう解散だよと……。

森田 臨時国会の冒頭解散か、途中の解散か、それから終盤の解散か、三つの案があったんですね。それで、冒頭解散は野党の抵抗が強すぎると。それで、一応、審議に入って法案が流れてもいいから解散する、ということに落ち着いたんだと思います。

——そのためには、法案を残しておかなければいけない。あの後、斎藤幹事長が、安井謙参院議長でしたかね、「法案が全部、流れちゃう」と言ったら、「これでいいんだ、これでいいんだ」と。「それ、どういうことですか」と言ったら、「後で分かる」と一言ったのですが、あの時、やっぱり大平総理と斎藤幹事長とは、そういう話をしていたわけですね。

森田 そうです。

——それが、後に言う「図りに図った解散」

森田 八月の半ば頃からずつと……。

——そうやって、本来にある意味では政略的にも「図りに図って」解散に持ち込んだのですが、その時に一般消費税が出てきて最大の敗因となりました。この一般消費税導入構想というのは、大平さんが、主導権を握っていたのか、それとも誰かにアドバイスされたのですか。

#### 一般消費税の導入構想は大平本人だ

森田 大蔵省が言っていましたけど、これはあくまで（大平）本人だと思います。本人がどういう心境にあったかという点、大蔵大臣の時に大量に赤字国債を発行して、それで「この始末は俺が必ず

実  
つける」ということを言つてたんです、大蔵大臣を辞めた後も。たまたま総理大臣になったので、こ  
就  
こで「あの時の始末をつけなきゃいかん」というんで、大蔵省の言っている一般消費税を自分が取り  
華  
上げて、主導的に国民に説得すれば分かる、というふうに思つていたんですね。

去  
——国民にとつて厳しい政策でも、ちゃんと説明すれば分かるということを言われたわけですが、  
結局、選挙で税金を上げるということを争点にするのは無理だった。あの時は最後に撤回されますよ  
ね。撤回に至る経過で、大平さんはどんな感じで考えておられたのですか。

森田 私は選挙の時に、大平の代理で地元（選挙区）に行つていたので、そのところはよく知ら  
ないんです。私もその辺の経過は良く分らないんです。

——結局、選挙は二百四十八議席という敗北でした。あの当時は二日間にあつて開票が進むわけ  
ですけども、大平さんは月曜日の午前中に党本部に行きますよね。あの瞬間に辞めるといふような気  
持ちを、伊東さんたちに漏らした、という場面はあつたのですか。

森田 いや、そういう場面はありません。辞めるといふ気持ちを持つたかどうか、それは分かん  
ないです。そのところは、私は知りません。私にも何も言わなかつたし、それは……。

——それから四十日抗争に入り、実力者会談が始まります。三木さんから始めて、中曽根（康弘）  
さん、福田さんと行くわけですけども、その経過で、何か記憶に残るものはありますか。

森田 中曽根さんがですね、「一応、実質は統投だ、しかし形式は一遍辞めて、われわれがもう一  
回、大平さんにやつて下さい」といふことで統投する、という形はどうか」といふような話があつたと  
いうんで、私は、大平に「そんな話、駄目ですよ」と言つたのです。一遍、辞めたということになつ

たら、彼らがもう一回、大平を推すという保証は何もない、と。「そんな話に乗ったら駄目ですよ」ということを言った記憶があります。

——結果的には、総選挙後の首相指名選挙は本会議決戦にもつれ込むわけです。大平さんは、福田さんが手を挙げて自民党の分裂選挙にさせるといふふうには予想されていましたか。

森田 予想していなかったです。まさか、本会議場でそこまでやるというふうには予想してなかったと思います。大平にとっては本会議場内で自民党内の争いをするようなことは、おおよそ考えられない、ということだったのです。ただし福田サイドには怨念があったと思います。大体、福田内閣で総選挙をやらせてもらえなかったこと。だから大福間の密約というのを守らないのも当然なんだと。それで大平は選挙があつて負けたのに辞めない。それで、これは何としても許せないということでしょう。

——福田さんと大平さんは、大蔵省の先輩後輩ですが、派閥の領袖になってからのお話はあつても、それ以前で心が触れ合うような話をされたというのではないのですか。

### 大福会談以外には両者の接点がない

森田 ない、ない。大福会談以外はないですよ。大福会談で話をして、最後にちよろつと、「君の推薦人になる」とか何とかいうようなことを言われて、「福田さん、本当にそう思っているんだなあ」と大平は信じた。その時は、「福田さんというのは立派な人だ」といふふうに信じておつたのです。

実 それに大蔵省の先輩後輩といつても、離れ過ぎているんですよ。入省が昭和四年と一一年ですからね。就 そのくらい離れてしまうと、大蔵省の先輩後輩という気持ちがあるが、一緒に仕事をしたこともなければ……。華 その点では大平は池田（勇人）さんとはそういうつながりがある……。池田さんとそれに田中角栄さんの影響が大きい。角栄さんとの間では、大平が福田さんに会ったり飯を食ったりするのは、角栄さんに悪いというような気持ちもあつたと思います。

——大平さんが別に福田さんを意識的に避けていたわけではないのですか。

森田 避けていたわけではないんですよ、結果的に。その辺が逆に言えば、大福対決そして四十日抗争の伏線になつてゐるわけですよ。

——福田さんとの本会議決戦は、辛うじて勝ちますよね。あの時に新自由クラブから四票入りしましたが、大平さんは誰と話をされたんですか。河野（洋平）さんですか。

森田 いや、大平は河野さんとも直接には話してないと思います。西岡武夫さんとも、山口敏夫さんとも、直接には話をしてないと思います。佐々木義武さんが交渉したのです。

——結果的には、新自由クラブから四票。そこで、さあ組閣という時に、新自由クの取り込み話が出て、結局、その話はずぶれますが、あの間に大平さんと河野さんとの間は、どういふふうになつていたんですか。

森田 大平・河野会談というのはありました。ただ、話はしたんですけども、双方に信頼関係がないんですよ、河野洋平さんとの間は。結局ね、肚の底から打ち割つた話を両方ともしないので。私もいたんですけども、表面的な話ばかりで、話を通じないのです。だから党は違つていても別の

党ですけども、大平と公明党の竹入（義勝）さんというのは電話で話し合っていました。民社党の春日一幸さんと。しかし河野さんとは……。結局、キャラクターの違いでしょうか。だから西岡さんが山口さんが代表だったら、連立の話はまとまっていたんじゃないかと思うんですよ。大平は、あの時は何が何でも新自由クと連立という気持ちじゃなかった。要するに、四票入れてもらったから恩返しに声は掛けると。だけど、なかなか心は通じない。だったらいいや、ということでしたな。

——第二次大平内閣もスタートから大変だったんですけれども、伊東さんが官房長官になった、それに大來佐武郎、佐々木義武さんといった大平さんの昔からの仲間「九賢会」のメンバーが入って、気持ちが大分変わったのではないですか。

## 第二次内閣では大來外相を起用したかった

森田 伊東官房長官というのは、大平が何にも話さなくても通じるといような、安心感というか、氣を使う必要がないというような状況になったわけですね。佐々木義武さんのケースは、とにかく「自分は辞める前に、通産大臣をやりたい。前に科学技術庁長官をやったんだけども、通産大臣をやつて辞めたいんだ」ということで大平のところに行ってきたんですよ。一方、大平は大來さんを起用しようというんだけども、ご本人に事前に話をしてない。で、大來さんが掴まらないんですよ、組閣になつても。あと一五分だけ待とう、それで駄目だったら、宮澤喜一さんにしよう。それで、大來夫人が大來さんが行きそう、いろいろな所に電話を掛けて、それで一五分がたつ寸前に大來さんから

官邸に電話が入ってきたんですよ。それで、大平はホツとしたわけです。

—— 一部には宮澤さんを外相にするのは気が進まないから大來さんにした、という説がありました  
が……。

森田 そうじゃないんです。とにかく大來さんを使いたいということです。大來佐武郎という男を好きだということでした。それで大來さんを探していたんだけど、見つからないものですから、それじゃもうしょうがない、宮澤さんで行こうかというふうになっていたら、大來さんから電話がかかってきたんです。

—— そうやって何とか第二次大平内閣がスタートするのですが、その半年後にはまた政争の嵐に巻き込まれて、亡くなられるわけです。その前に五月の連休にアメリカ、メキシコ、カナダに行かれて、ちょうどその時に、チトー大統領が亡くなり、ユーゴへ行って国葬に参列されましたね。

チトーの葬儀には行きませんでした

森田 大平はチトー大統領の葬儀には行くつもりはなかったんですよ。途中で加藤（紘一）官房副長官や私に「俺は行きたくない。帰る」と言っただんですよ。チトー大統領が亡くなったのは、メキシコからカナダへ行く途中でした。「国内をあんまり空けるのは良くない。自分は帰る」と言うのです。それで「総理は本当に疲れておられるんですか」と聞いたら、「俺は身体の方は大丈夫だ」と答えました。カナダの本会議場で演説している時に、ソ連のブレジネフ書記長も列席するような状態に

なったので、「外交儀礼からみても、非常に具合が悪いんじゃないですか。行くべきじゃないですか」と、加藤副長官に言ったんです。私が加藤副長官が伊東官房長官と連絡して、やっぱり行くことになったのです。

——ユーゴに行きたくなかったのは、国内政局の空気が不穏であるということだったからですか。

森田 いや、その前から、予算が国会を通過する時に、野党の反対案に何人かが乗るかも知れませんが、造反があるかも知れませんがよという説があった。実際にはなかったんですけれども。もうその頃から、やっぱり何か不穏な動きがあるかも知れんというのは、本人が感じていたと思います。

——事前には、「チトー大統領が亡くなったら葬儀には行くつもりだ。目的は西ドイツのシュミット首相と話すんだ」ということを言われたそうですが……。

森田 西ドイツに行くというのは、前からの懸案になっていたんです。ただ、あの時は両方とも行かないで、帰るつもりだったんです。それを加藤副長官と私とで逆転したようになっちゃったんです。シュミット首相との会談は、なかなかよかったです。カーター米大統領とか世界の首脳の人物評がぼんぼん出てきて、大平がカーターさんを一生懸命、弁護した、という話はしてましたね。外務省の役人を入れないで、通訳だけでやったんです。二人だけで。

——最後に西ドイツでゴルフをされるわけですね。

森田 これね、ハーフと、その次にワンラウンドやったと思います。それまでね、宇都宮かどっかで政経文化パーティーを一月にやった時に、大平総理がこないというんで流れたことがあったんです。桜内（義雄）幹事長が代わりに行ったんですけど、幹事長が行っておるのにもかかわらず、政経文化

去 華 就 実

パーティーが流れたんです。で、それ以降は、土日、土日、全部、政経文化パーティーに当てられてしまい、それでゴルフは全然やれなかったのです。それで、久し振りに大好きなゴルフをやったというので、非常に上機嫌でした。それが実は最後のゴルフになっちゃった。本人は政治家を辞めたら、毎日、ゴルフをしたいと言っていたのに……。

——帰ってみたら国内政局はきわめて不穏で、結局、予想通り大平内閣不信任案が出てくるわけですね。自民党内の反主流派が衆院本会議を欠席する、そして不信任案が可決、というケースは考えられませんか。

### 内閣不信任案可決で解散へ

森田 大平は福田さんとか三木さんとか中曽根さんとかいう人も、最終的には否決の採決に入ってくると思っていたんですよ。入ってくると思ってたんだけど入ってこない。それで伊東官房長官が河本敏夫さんを説得し、それから桜内幹事長が説得しに行くんです。それであの日の一二時頃からは、院内の大臣室で、その会合の様子を見ながら、本会議を延ばしたんだけど、野党のほうが待てないとか言ってる……。その時に安倍（晋太郎）政調会長に向かって、大平は何となく「俺が出来が悪いから君らに苦労かけるな」とか言っておつたんです。安倍さんもまだそこにおるもんですから、最終的には本会議にも出席すると思っていました。

——安倍さんは本会議場において、最後に退場しますね。逆に中曽根さんが入ってこられて、大拍手になりました。あの時、大平さんは、中曽根さんとは何か連絡をされたのですか。

森田 連絡はしていません。中曽根さんご自身の判断でしょう。

——大平さんが不信任案の採決をやったら負けると判断したのはいつ頃ですか。本会議に入る前に、そういう気持ちは持っておられたのですか。

森田 いや本会議に入っても、まだ福田さんたちが入ってくると思っていたようです。本会議のベルがなる前、議院運営委員長の亀岡（高夫）さんが、大臣室で待っておる時に、「本当にベルを押しているんですか」と言ったら、大平は「本当にいいんだ」と言っただんです。ベルを鳴らせば入ってくると福田さんたちを信じていたと思います。それに万一、不信任案が可決になった時には解散しようというのは、もう、その前の予算の時から決心していましたから。どうしようかという迷いは全然ないんですよ。予算が不信任案か、どっちかで反主流の抵抗が出てきたら解散するということは、その前の三月の時点で決心していましたから……。

——ただ、それでも、あの時の大平さんの表情は、非常に淋しそうでしたね。

森田 そうですね。でも私にも何も言いませんでした。じいっと黙って座っていて、本会議が終わった途端に臨時閣議を招集し、倉石（武雄）法相なんかを缶詰にして閣議決定をやりました。その時点で六月二二日の衆参同日選挙が決まり、二週間も経たない時に参議院選挙の公示となるわけです。

——その参議院選挙の公示は五月三〇日ですね。森田さんはどの時点で大平さんの体調に異変が生じたのを承知されたのですか。

森田 私は地元高松にいて、大平の代理として参院選の地元候補応援の第一声をやっていました。天気が悪くて飛行機が飛ばないというので、連絡船と新幹線を乗りついで、瀬田の自宅についたのが

就 実 夜の一時前でした。家の前に娘の満子が立っていました。何か起こったなと直感して、満子に聞くと大平が病氣だと言う。すぐ大平邸にかけつけました。

華 ————どんな様子でしたか。大平さんご本人はどうしていましたか。

去 森田 伊東官房長官、田中六助先生、秘書官全員、鶴巻（龍之助）、山口（洋）先生といったドクターの方々が集まっていました。大平は奥の狭い日本間で寝ていました。「苦しい。胸が締めつけられるようだ」としきりに言っていました。どうやって虎の門病院に入れるかという話を六助先生と私がやりました。それで裏口から入れるということにしたのです。大平と大平裕（二男）と山口先生を乗せた寝台車が大平邸を出たのは、日付が変わった三十一日の午前零時半です。私は別の車で後を追ひ、虎の門病院に着くと、すぐ六階のCCU（集中管理室）に入れられました。心電図がすぐ近くの看護婦室にあるセントラルモニターで見ることが出来るようになっていました。すぐ点滴が行われ、鎮静剤のせいもあって、大平は眠りに落ちたのです。

———歴史にifはないんですが、もし大平さんが倒れた時に、二ト口があつたら……。

森田 そうそう。私は日頃二ト口を持っていました。ただ、あの日は私は地元だったので。大平は、心臓もそれまで心電図とかなんか全然異常ないし、心臓が悪くなるという予兆も全然ないんですよ。それまでは糖尿と通風と、この二つなんです。主治医の葛谷（信貞）先生も、心臓の異変があり得るといふようなことは、全然、本人に言ってません。「この苦しさは心臓だったのか」というのが後の感想で。心筋梗塞ですよと言われて……。ただ、六〇歳以上の年齢になると誰でも二ト口を持つておるべきだ、というのが葛谷先生の意見でした。本人も事前に何か心臓が悪いというようなことが

あつたら、私も二ト口を於久（昭臣）秘書官や福川（伸次）秘書官に渡しておいたのですけどね。 i f  
というの是一般論ということではないと思います。

——入院されてからは、むしろ落ち着いていて、ご本人は「治った」とか言われていたそうですね。しかし、実際はそうではないというので、森田さんはずい分苦労されたのではないですか。

### 虎の門病院での入院生活

森田 入院の翌日、目を覚まして「心臓の発作だったのか、全然わからなかった。それだったのなら横浜で四カ所も演説するのは無理だったなあ」とか「何か胸がしめつけられるようだったんだ。身体からしほり出すようにしないと声が出なかつたんだ」と言っていました。二三日経って苦しさがとれて少し落ち着いてくると、本人は「治った」というふうに言うんですね。私は記者団のほうに軽く見せなければいかんものですから、全然だめな時も、重湯を持ってきて私が食べて、それで台所に下げている。記者の人が台所へ確かめに行くわけです。お粥を食べたかどうか確かめに行つて、森田秘書官の言うのは本当だ、というふうに信じてもらつたんですけどもね。

——実際に番記者の代表との会見をやりますね。あの時は大平さん自身は、ご自分でも病氣は快方に向つていてという意識があつたんですか。

森田 あつたんです。

——あの当時、健康そうに見せるために化粧をしたというようなことが言われましたが……。

実 森田 いやいや、そんなことは全然ないです。ただね、中川一郎さん（代議士）が「大平さんは、もうよだれを垂らしてる」とか言っており、「それを打ち消すために二三分でもいいから記者会見してくれば、そういう噂はなくなりますよ」と、しきりに言ってきたので、お医者さんと相談したから、「まあ二三分ならいいでしょう」ということになって、あの会見になったのです。

——大平さんはベネチア・サミットにも「俺が行くんだ」ということを言われていましたね。ご本人は一貫して「大丈夫だ、行ける」というふうに思っておられたのですか。

森田 思っていました。本人は結局、あまり医学のほうに詳しくないほうですから、自分が苦しかったら悪い、楽になったらもう良くなっているんだと、そういう判断なんです。また発作がくると何かかということは、そういう危険性があるんですよ、ということは医者から言われているんですけども、こんなにもう良くなっているのに、という感じなんです。それで佐藤（嘉恭）秘書官が飛行機で現地に行つて、大平を車椅子でどうやって降ろせるか、ベネチア空港の階段がどれだけあつて……なんてことを調べることにしていただきました。

——あの会見があつて、それから選挙の分析等もされていきましたね。

森田 そうそう、総務局長の塩崎（潤）さん、幹事長の桜内義雄さんが二人でこられて、とにかく選挙を勝たなきゃならないと、亡くなる前の日までやっていましたよ。

——お見舞いの人も多かったが、どういうふうに対応されたのですか。

森田 大部分は私が応対して帰ってもらったのです。あとで渡辺美智雄さんに聞いたところでは、見舞いにきて私の顔を見て、私が大平に会わせるかどうか一瞬の迷いがあるのを見て、私の顔つきか

「これはかなり重いなと感じたと言っていました。三木元総理も見舞いにこられて、伊東官房長官が応対されましたが、伊東長官は扇子で三木さんの腕をポンと叩いて、「あなたがあまりいじめるので、こんなことになったんです」と皮肉まじりに言っていました。伊東長官が大平に向って、「俺も昔、このような病気になったことがあるが、俺のときはこんないい機械はなかったなあ」と言うと、大平は「お前は獣医に診てもらったのか。お前が診てもらうのは獣医のほうに向いている。俺は普通の医者に診てもらっているんだ」とからかい、それでも「伊東君には迷惑をかけるなあ」としみじみもらしていましたね。

——そして運命の日、六月一日から二日になるわけですね。どんな様子でしたか。

森田 この日はおやつの小倉アイスを食べ、看護婦さんに「虎の門病院の看護婦さんは美人で気が利いて親切だ」などと普段は言わないお世辞を言っていました。そのあと、さっき言ったように桜内幹事長らが出て選挙情勢を報告したのです。その夜、私たちは翌朝出発予定の佐藤秘書官を交えて、ベネチア・サミット行きの手合わせをしました。木村秘書官は、大平の足のマッサージをやっていました。いったん、寝たあと、一度目覚めた大平は、付添いの菊川さんに「いま何時ですか」とたずね、菊川さんが「一二時頃です」と答えると、「そう」と答えて再び眠りについたのでした。

——異変はそのあとに起こったのですね。

森田 そうです。「早く起きて下さい」という菊川さんの悲鳴のような声を聞いたのは三時二五分でした。セントラルモニターの心電図の異常を発見した看護婦さんがかけつけ、胸を開いてこぶしで激しく叩いていましたが、既に意識は完全になかったのです。若い医師がかけつけて、ベッドの上で

心臓マッサージを始めましたが、時折り「ウー」という声が出るだけで、四時頃にはもう臨終近いように見えました。

——結局、亡くなられたのは午前五時五四分ですが、一応の死亡確認というか……。

森田 だけでも、実際はね、その一五分くらい前に亡くなっていたと思います。亡くなっていたんだけど、まだお医者さんは心臓マッサージを諦め切れないもんですから、やっていて、それで六助先生が「もう止める。本人、痛がってるじゃないか」ということを言って、それでその時が死亡確認になったんです。あとで判ったのですが、肋骨が二本、折れていたんです。

——それでその時に総理大臣臨時代理を「伊東さんにしろ」と言っただのは……。

### 伊東総理臨時代理と森田補充立候補の経緯

森田 これは六助先生が言っただけです。

—— 一部には大平さんご自身が生前に「臨時代理は伊東、お前がやれ」と言っていたと伝えられていますけれども……。

森田 それはない。作った話です。本人は死ぬと死んでいないもの。六助先生が、伊東さんに「あなただ。あなたが臨時代理をやらなければ駄目だ」と言っただけです。

—— その時、伊東さんは。

森田 すんなり受けました。それから私に向かって「確か補充立候補という制度があるということ調べてみる。お前、出る」と言われたのも六助先生です。

——つまり大平さんは、病気になる段階でも、辞める気はなかったというわけですね。ただ、後継者についてはどう考えておられたのですか。

森田 次の選挙までは自分がやると思っていたんですよ。次の総選挙の時に大平内閣退陣、それから政治家も辞める、と。それで私に「次の総選挙は俺は出ないから、お前、準備しておけ」ということを言われていたんです。けれども、選挙後も総理はそのまま続けるつもりだったわけですよ。

——七〇歳の誕生パーティーの時に、大平さんは挨拶で「これからは後のことを考えて……」と微妙なことを言われていましたね。

森田 暗にですね、頭の中には宮澤さんのことがあったと思います。自分の意向いかんにかかわらず、いずれあとは宮澤君になるんだろうな、というような感じはあったと思います。その一例ですが、大平内閣ができた時に、私に「宮澤君にこの一〇のことについて意見を聞いてきてくれ」と言いました。それで、伊勢参りをすべきかどうかとか、一般消費税のことなんかについても……。

——あの時は宮澤さんではなくて、鈴木善幸さんが後継総理になりますね。そのうち中曽根康弘、竹下登といった人たちを経て、宮澤総理が実現するわけですが……。

森田 あの時は、六助先生が宮澤先生の所へ「君、総理になるつもりはあるか、ないか」とか言って、宮澤先生が「いやー」とか言ったら、「君はないんだなあ。それじゃー」とか言って……。その後は鈴木善幸先生を推すということで党内の根回しを進めたという経緯があるのです。

——大平さんは、基本的にはそんなに争い事を好む方ではなかったですね。ところが結果的には、あの大平内閣の一年七カ月は、本当に政争の連続だったわけですね。支えておられた森田さんとして、

大平さんという人は、なる時を間違えたのか、結果的に運が悪かったのか、それともそれなりに何か残せたのか、どう思っておられますか。

### 総理の責任は政治に責任をもつこと

森田 まあ、政治を責任を持ってやるというのが、総理の責任だということだけを示し得たのではないかと思うんです。政治というのは、こつこつに責任感をもつて、命を張ってやらなきゃいかん、というふうにして、本当にそのために死んだんです。それだけが、唯一、残した遺産だと思いますね。

それから、細かい話ですけれども、私が随っていて非常に思ったのは、総理というのは「警護官は要らないよ」と言っても、何かあったら警察庁長官が辞めるということになって、警護官を付けざるを得ないですよ。それと同じように、医者を本人が嫌だと言っても付けるような制度を作つたらいいと思つたんです。それと同じように、歴代の総理に。ある一代の総理の時だけ医者を付けるということになると、あの総理は健康がおかしいと噂になりますから、本人が嫌だと言っても、付けるような制度を作つてくれないかなあと思います。二ト口とか何とかいうのは、そういう医務官さえいれば、大平総理が死ななくてすんだという、これはいわば反省ですね。

——最後になりますが、森田さんにとって身近な岳父であり、政治上の師でもあった大平正芳という人物をどう考えておられますか。

## 大平内閣に関する真実

森田 大平は、私自身がこれでもいいのかと思うほど、私を信頼し頼りにしてくれました。婿である私への溺愛か、それとも私の能力への過大評価であつたのかは定かではないのですが……。私にとつては、側に長い間いられたのは、本当に幸せなことでした。そのせいで私は大平の心の底を深くのぞくことができたのです。人間・大平正芳を近くで学ばせてもらったことは、私の人生における珠玉の実質をなすもの といつても過言ではないでしょう。私はその後姿から多くのことを学んだと思います。その思想と生き方を少しでも実践し、地元はもとより世界中の人々に、特に若い人々に伝えたいと思っています。

(一九九九年二月一日 森田一事務所取材)

森田一(もりた・はじめ) 一九三四年、香川県生まれ。五七年東大法学部卒、同年大蔵省に入省。六三年から五二年まで大平外相、大平蔵相の各秘書官を務める。七七年大蔵省銀行局保険第二課長、七八年同理財局資金第一課長をへて、同年一二月大平内閣の発足と同時に首相首席秘書官に就任。八〇年大蔵省を退官と同時に衆議院議員に初当選、以後連続六回当選。八七年自治政務次官、八九年運輸政務次官、九七年総務会副会長に就任、現在にいたる。著書に『最後の旅 残された唯一の大平宰相日記』など。